

移動動詞「来る」の文法化と方向づけ機能 ——「場所ダイクシス」から「心理的ダイクシス」へ——

澤 田 淳

京都大学大学院／日本学術振興会

This paper clarifies the characteristics of one type of Japanese auxiliary verb *te-kuru* (an auxiliary verb derived from *kuru* 'come') which indicates the direction of action as in *Ooya-ga yachin-o age-te-ki-ta* 'The landlord raised the rent on me'. *Te-kuru* in this use can be considered as "psychological deixis" in the sense that it does not indicate the objective motion of the subject referent toward the speaker's dominion, but rather the speaker's attitude toward the event or its psychological influence on the speaker. *Te-kuru* in this use can be accounted for in terms of the general tendency in Japanese to distinguish the speaker's dominion from that of others. The same characteristic can be observed in regard to other deictic expressions.

キーワード：ダイクシス表現、心理的ダイクシス、「てくる」、文法化、領域区分化

1. はじめに

あらゆる自然言語の発話は、特定のコンテキストの中で機能し理解される。コンテキストとは、当該の発話を取り巻く状況・背景であり、「今・ここ・私」を座標軸の原点とする「発話の場」(Bühler (1934: 79) の言う「指標野」(Zeigfeld)) を中心として、同心円上に幾重にも広がり得る。話し手(広義には、認知主体)は、「発話の場」に身を置き、時間的、空間的、対人的な距離意識の下に事物・事象を捉え、それを概念化する。コンテキストをこのように位置づけるならば、「ダイクシス(直示)」(deixis) は、言語とコンテキストの関係を最も直接的に反映した意味カテゴリーとみなすことができる。なぜなら、ダイクシスは、「発話の場」と相関して解釈が決まる表現体系であり、「発話の場」そのものを取り込んだカテゴリーであるからである。

「今」、「ここ」、「私」のそれぞれを座標軸の原点に据えるダイクシスに、「時間ダイクシス」(time deixis)、「場所ダイクシス」(place deixis)、「人称ダイクシス」(person deixis) が

* 本稿は、2007年度日本語用論学会、2008年度日本語学会(春季大会)において発表した内容に
加筆・修正を施したものである。

ある。これらに「社会ダイクシス」(social deixis)、「談話ダイクシス」(discourse deixis)を加えた5つが一般にダイクシス体系を形成するとされる(Sidnell 2009: 115)。

本稿の目的は、「場所ダイクシス」の「来る」が複合動詞の後項へと文法化した補助動詞「てくる」に関するケース・スタディを通して、新たに「心理的ダイクシス」(psychological deixis)のカテゴリーを提案し、「心理的ダイクシス」の「てくる」の発達が、自己(話し手)の領域に属するか他者(聞き手、第三者)の領域に属するかによって事物・事象を敏感に表現し分ける(言語的に区別する)に至る日本語の歴史的変化の潮流の中に位置づけられることを、韓国語との対照から示すことである。

2. 移動動詞「来る」の文法化と心理的ダイクシス

ダイクシス表現は、その意味内容が話し手との相対的な位置や距離に基づいて決定される「自己中心的」特徴を有しており(Lyons 1982: 121)、話し手の視点が刻印された主観的表現である。ダイクシスを貫徹する原理は、発話の座標軸の原点からの距離である。この距離は「近接」(+Proximal)と「遠隔」(-Proximal)とに二分される。

「来る」は、話し手領域への求心的移動を表すダイクシス動詞であり、それ以外の領域への非求心的移動を表す「行く」と対立する。多くの言語において、COME動詞は、GO動詞と並び最も連動詞化を起ししやすい動詞であり、多様な機能領域への拡張を引き起こす動詞でもある(DeLancey 1991: 12; Heine and Kuteva 2002: 68-79)。「来る」もテ形複合動詞の後項である補助動詞への文法化に伴い多様な表現機能を表す語として発達を遂げており、少なくとも以下の用法が認められる(坂原 1995; 澤田 2008)。

- | | |
|---------------------------------|--------------|
| (1) 学校までバスに乗 <u>って</u> きた。 | (「同時移動」) |
| (2) 家でご飯を食 <u>べ</u> てきた。 | (「継起移動」) |
| (3) 太郎がアメリカから帰 <u>っ</u> てきた。 | (「移動の方向づけ」) |
| (4) ヤクザが私を脅し <u>て</u> きた。 | (「行為の方向づけ」) |
| (5) 空が明るくな <u>っ</u> てきた。 | (「変化型アスペクト」) |
| (6) 今日まで一人で店を切り盛 <u>り</u> してきた。 | (「継続型アスペクト」) |

(1) では、前項動詞が「くる」と同時進行の行為を表し、「くる」の移動の様態を表す。(2) では、前項動詞が「くる」以前に起こる行為を表し、「くる」との間の継起的な関係を表す。(3) では、前項動詞が起点と着点を内在した限界性を有する移動動詞であり、「くる」が主語の移動の話し手領域への方向づけを表す。(4) では、前項動詞が行為を表し、「くる」が主語の行為の話し手領域への方向づけを表す。(5) では、前項動詞が変化を表し、「くる」がその変化の始動・開始を表す。(6) では、前項動詞が行為を表し、「くる」がその行為の現在時に至るまでの継続的な展開を表す。いずれの「てくる」も、ダイクシス動

詞「来る」の求心的直示性のスキーマを保存している。¹

「Vてくる」の形だけでは、用法が一義的に決まらない場合が多い。たとえば、「走ってくる」は、次の4つの解釈が可能であり、その解釈はコンテキストに依存する。

- (7) a. (家からここまで) 走ってきた。 (「同時移動」)
- b. (さっき公園を) 走ってきた。 (「継起移動」)
- c. (敵のランナーが2アウトの場面で) 走ってきた。 (「行為の方向づけ」)
- d. (毎朝公園を) 走ってきた。 (「継続型アスペクト」)

本稿では、(4) や (7c) のような「行為の方向づけ」の「てくる」に焦点を当てる。「行為の方向づけ」の「てくる」は、主語の物理的な空間移動を含意しない点で意味が抽象化しており、「主体化」(subjectification) (Langacker 2009: 85) が進んでいる。たとえば、「太郎が本を返してきた」の「てくる」は、「太郎が(図書館に)本を返却してから話し手のもとにやってきた」という「継起移動」の解釈の下では、主語の空間移動という客体的関係が保持されているが、「太郎が話し手に本を戻してよこした」という「行為の方向づけ」の解釈の下では、主語の空間移動という客体的関係は希薄化し、話し手領域への「方向づけ」という主体的関係のみが顕在化している。この意味で、「場所ダイクシス」の「来る」からの拡張用法である「行為の方向づけ」の「てくる」は、新たに「心理的ダイクシス」と称し得るダイクシスのカテゴリーの中に位置づけることができる。「心理的ダイクシス」とは、「遠／近」の心理的距離に基づき事象を話し手に関係づけるダイクシスであり、真理条件的意味からは独立している。²

3. 先行研究とその検討

本節では、「行為の方向づけ」の「てくる」を「逆行態」(inverse voice) という人称階層に依存した一般言語学的なヴォイス現象として位置づけている分析を検討する。

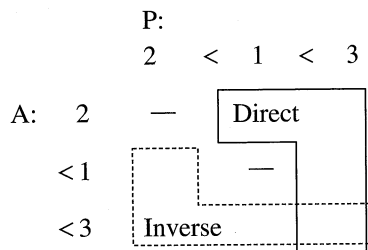
言語普遍的傾向として、「一人称、二人称>三人称・近接 (proximate) >三人称・疎遠 (obviative)」という人称階層 (高位>低位) が認められる (一人称と二人称の序列は、言語により異なる) (Comrie 1989: 128; Shibatani 2006: 246)。人称階層と他動性の相互作用

¹ これらの用法の中で、「行為の方向づけ」の「てくる」のみが「ていく」を対応形式として持たない。この用法の「てくる」では動詞の普通形が対応形式となる。

(i) 私は太郎を {脅した/*脅していった}。

² 「心理的ダイクシス」は、「言表内容」(what is said) とは独立した非真理条件的意味でありながらも、「会話的推意」(conversational implicature) とは異なり、言語的にコード化される意味の一面面を表す点で、「慣習的推意」(conventional implicature) の領域の意味として機能すると言える。

が文の形を決定する要因となる言語がある。そこでは、高位の名詞項（動作主）から低位の名詞項（被動作主）に対して行為がなされる場合は「順行態」(direct voice) が選択され、逆に、低位の名詞項（動作主）から高位の名詞項（被動作主）に対して行為がなされる（行為の方向が人称階層に逆行する）場合は「逆行態」が選択される。順行態／逆行態は、北アメリカや北東アジアなどの言語で報告されている。北アメリカのアルゴンキン語族に属する平原クリー語 (Plains Cree) では、「二人称＞一人称＞三人称（近接＞疎遠）」（高位＞低位）からなる人称階層のシステムに基づき、下の図に示す順行態と逆行態の選択範囲が決まる（A = 動作主、P = 被動作主、2 = 二人称、1 = 一人称、3 = 三人称）。(8) は、この言語の順行態、逆行態の例を示している。



図： クリー語の順行態・逆行態の意味地図 (Croft 2001: 287)³

- (8) a. ni-se:kih-**a**-wak. (順行態) b. ni-se:kih-**ik**-wak. (逆行態)
 1SG-frighten-DIRECT-3PL 1SG-frighten-INV-3PL
 ‘I frighten them.’ ‘They frighten me.’

(Shibatani 2006: 246)

Shibatani (2003, 2006)、古賀 (2008)、Koga and Ohori (2008) は、日本語では、次の a 文のように、高位の名詞項から低位の名詞項に対して行為がなされる場合には動詞の普通形が実現し、一方、b 文のように、低位の名詞項から高位の名詞項に対して行為がなされる場合には「てくる」形が実現するとし、日本語では、動詞の普通形が順行態、「てくる」形が逆行態として機能するとした (cf. 久野 1978: 177)。⁴

³ Croft (2001) では、図の < が不等号（大小関係）としてではなく、高位の人称から低位の人称への順序 (ordering) を示す記号として使用されている。

⁴ Shibatani (2003: 278) では、(9b)、(10b) のように、物の授与／移動（ないしはそれに準じる行為）を表す動詞（三項述語）と共起した「てくる」の事例しか想定されていない。これに対し、古賀 (2008: 246) は、次のように、物の授与／移動を表す三項述語以外の動詞にも逆行構文の「てくる」が使用可能であるとする (Koga and Ohori (2008: 43) も参照)。

(i) ケンは僕を {#脅迫した／脅迫してきた}。

(古賀 2008: 246)

- (9) a. 僕は花子にボールを投げた。
 b. ケンが僕にボールを {*投げた／投げてきた}。
 (10) a. 僕は花子に電話をした。
 b. ケンが僕に電話を {*した／してきた}。 (Shibatani 2003: 274)

しかし、問題の「てくる」を逆行態とみなした場合、逆行態の定義との齟齬が生じると思われる。以下、問題点を2点挙げる。

第1に、定義上、逆行態は、被動作主が動作主よりも人称階層において高い場合に用いられ、人称が関わる他動的行為を前提とする (Comrie 1989: 129; Croft 2001: 287)。しかし、問題の「てくる」は、(11) のような人称階層が動作主より上位とは言い難い被動作主が実現する他動詞文や、(12) のような自動詞文にも実現する。⁵

- (11) a. 会社が一方的に契約を破棄してきた。
 b. 家主が家賃を上げてきた。
 (12) a. 変な男が隣に座てきた。
 b. 敵の走者が2アウトの場面で走てきた。(ベンチにいる監督の発話)

第2に、他動的行為に限定したとしても、「てくる」には逆行態の人称原理に従わないパターンが存在する。たとえば、二人称の名詞項から三人称の名詞項に対して行為がなされる場合、人称階層の序列に従うため、順行態で標示され逆行態では標示されないことを予測する。しかし、この予測に反し、「てくる」が使用できる。

- (13) 君が太郎にボールを投げてきた。(二人称→三人称)

そもそも問題の「てくる」の被動作主は、一・二・三人称全てが実現し得る点で、人称制限からは自由である (例：山田が {私／君／太郎} にボールを投げてきた)。

本稿では、問題の「てくる」は、次の視点制約を満たしていればよいと考える。

- (14) 「行為の方向づけ」の「てくる」は、主語の行為が話し手領域に仕向けられることを表し、そこでの主語は話し手であってはならない。

これによれば、(13) の「てくる」も、行為が話し手領域に仕向けられたことを示す。目的語「太郎」は話し手領域にいる者に過ぎない。たとえば、(13) がドッジボールの状況で使用された場合、「太郎」は、通例、話し手側の陣地にいることになる。(9)-(13) の「て

⁵ 古賀 (2008: 256)、Koga and Ohori (2008: 43) では、「変な男がこっちを見て、にやにや笑ってきた」のような例も逆行態として取り上げられているが、ここでの文は被動作主を含む他動的行為とは言えないため、逆行態とみなしてよいのか疑問である。

くる」は、一貫して主語の行為が話し手領域に仕向けられたことを表す。(14)の視点制約は、これら全ての例に対して統一的な説明を与えることができる。

Shibatani (2003)、古賀 (2008)、Koga and Ohori (2008) は、さらに「てくれる」も逆行態とみなしている (Oshima (2007: 739) も参照)。しかし、この分析も逆行態の人称原理に従わない「てくれる」のパターンが説明できない点で本質的な問題がある。⁶

(15) 君が泥棒を追いかつてくれた (ので助かった)。(二人称→三人称)

「ウチ人称」や「敬語人称」などの拡大的な人称概念によって、三人称を「一人称並み(話者の身内)」とみなし、逆行態に違反するパターンを処理する分析も考えられる。しかし、(15)の「泥棒」は話者の身内とは言えず、この分析にも破綻が生じる。

本稿の分析によれば、「てくれる」は次の視点制約を満たしていればよい(澤田 2007: 88)。この制約は、上の「行為の方向づけ」の「てくる」の視点制約と平行的である。⁷

(16) 「てくれる」は、事象がそれを認知する話し手にとって恩恵的であると捉えられることを表し、そこでの主語は話し手であってはならない。⁸

以上の事実、平原クリー語などの言語の逆行構文が示す「方向性」と日本語の「てくる」「てくれる」が示す「方向性」とが異質であることを示唆する。前者は「動作主-被動作主間の方向性」であり、後者は「事象-話し手間の方向性」である。「てくる」「てくれる」では、〈事象-話し手〉間の方向性が問題となるため、平原クリー語などの言語に見られるような〈動作主-被動作主〉間の「人称」の序列制約は適用されない。逆行態の人称原理を「てくる」「てくれる」に適用することには本質的な無理がある。⁹

⁶ 「てくれる」の被動作主も、一・二・三人称全てが実現し得る点で、人称制限からは自由である(例：山田が{私/君/太郎}に電話をかけてくれた)。

「てくれる」を逆行構文とみなす分析では、次のような例も問題となる。次の a 文は非能格自動詞、b 文は非対格自動詞から成り、いずれも被動作主を含む他動的行為ではない。

(i) a. 太郎がお使いに行ってくれた。 b. 雨がやんでくれて助かった。

⁷ 「てくる」(行為の方向づけ)や「てくれる」との間に人称制限があるのは、主語位置の「一人称者」に関してだけである(例：{*私/君/太郎}がボールを投げ{てきた/てくれた})。話し手が行為を仕向ける主体となっていることが、話し手に行為・事象が仕向けられることを表す「てくる」「てくれる」の求心的直示の特徴と齟齬をきたすのである。

⁸ (16)の一般化は、「共感度」に基づく分析(久野 1978)と異なり、「てくれる」が「文中の非主語」にあっての恩恵性は表さず、話し手にとっての恩恵性のみを表す構文であることも示している(久野 (1978)の視点論の問題点に関しては、澤田 (2007; 2009) 参照)。

⁹ 英語をはじめ多くの言語では、GIVE 動詞の語彙的分化は見られないが(Newman 1996; 山田 2004)、世界の言語の中には「受領者」(recipient)の「文法的人称」(grammatical person)の違いに応じて GIVE 動詞が語彙的分化をなす言語がある。Comrie (2003: 267-270) は、(i) 受領者が〈三人称〉か〈一・二人称〉かで GIVE が分化をなす言語(ナンディー語など)と、(ii) 受領者が〈二・三

4. 「行為の方向づけ」の「てくる」の意味論的・語用論的制約

前節までの例が示唆するように、「行為の方向づけ」の「てくる」は、「来る」の直示スキーマを保存しつつも、文法化により次のような独自の表現機能を獲得している。

- (17) 「行為の方向づけ」の「てくる」は、話し手が（自己の心的領域内に「出現」した）主語の行為を自己に仕向けられた／仕掛けられた行為として心理的に捉えることを表す。

この表現機能により、その事象に対して、以下の意味論的・語用論的制約が課されることになる（以下、例文判断は「行為の方向づけ」として解釈可能か否かによる）。

第1に、このタイプの「てくる」では、前項動詞が行為動詞でなければならない。

- (18) 気味の悪い男が隣に {座って／?住んで／*居て} きた。

「居る」は状態動詞であるため不適格となる。「住む」は、命令文にできるため行為動詞と言えるが、典型的な行為動詞に比べ、通例行為性が薄いため不自然となる。

第2に、このタイプの「てくる」は、通常、動詞の否定形とはなじまない。行為が実現しなければ、自己への「仕向け・仕掛け」とは感じられにくいからである。

- (19) 車内で老人が僕の足を踏 {んできた／??まないできた}。

ただし、否定的事象それ自体が積極的な「仕向け・仕掛け」の行為と見なし得る自然な語用論的状况が想起されれば、次のように「てくる」が適格となり得る。

- (20) 後半に入っても敵は選手を {代えてきた／代えないできた}。

第3に、受動構文との比較から、「行為の方向づけ」の「てくる」の事象制約を考えてみよう。両構文は、並列的な使用が可能であることから、機能的類似性を有する。

- (21) 知人の飲食店店長は「五月に友野巡查長が自分の店に来て、佐藤さんのことを

人称) か〈一人称) かで GIVE が分化をなす言語 (マオリ語など) の存在を指摘している。

日本語の GIVE 動詞も「くれる」と「やる・あげる」に分化をなす。しかし、上の言語の GIVE 動詞と異なり、受領者の「文法的人称」が相補分布をなすとは限らない (例: 太郎が花子にお年玉を {くれた／やった})。さらに言えば、「くれる」の受領者の位置には、一人称、二人称、三人称全てが実現し得る (例: 太郎が {私／君／花子} にお年玉を くれた)。これらの事実は、日本語の二系列の GIVE 動詞が受領者の「文法的人称」の違いにより分化しているわけではないことを明確に示している。日本語では、「主語名詞句から話し手に恩恵が及ぶ授与行為」には「くれる」(この場合、物の受領者と恩恵の受益者が一致するとは限らない)、「主語名詞句から話し手以外 (与格名詞句) に恩恵が及ぶ授与行為」には「やる・あげる」が選択される (澤田 (2007) 参照)。

いろいろ聞いてきた。電話でも聞かれた」と話し、元交際相手の男性も佐藤さんから相談を受け、店を辞めるようアドバイスしたという。

(『静岡新聞』2007.8.23., 朝刊)

次の例では、両構文は共に適格であり、両者が置換可能な関係にある。

- (22) a. 私はヤクザに腕をねじられた。 b. ヤクザが私の腕をねじってきた。
 (23) a. 私は太郎に口説かれた。 b. 太郎が私を口説いてきた。
 (24) a. 私はヤクザに脅された。 b. ヤクザが私を脅してきた。

しかし、次の例では受動構文のみが適格となり、両者の適格性が異なる。

- (25) a. 私はヤクザに腕を折られた。 b. *ヤクザが私の腕を折ってきた。
 (26) a. 私は太郎に口説き落とされた。 b. *太郎が私を口説き落としてきた。
 (27) a. 私はヤクザに家族を殺された。 b. *ヤクザが私の家族を殺してきた。

(22b)-(24b) と (25b)-(27b) の「てくる」文の適格性の違いを説明するために、「行為の方向づけ」の「てくる」の事象に対して次の制約を想定してみよう。

- (28) 「行為の方向づけ」の「てくる」の事象は、最終的な結果を表す終結的事象であってはならず、話し手が主語の行為に対して、対抗策を講じるなどのその後の展開が期待できるものでなければならない。

この制約によれば、「ねじる」「口説く」「脅す」は働きかけを表すが、「折る」「口説き落とす」「殺す」は最終的な結果を表すため、前者と異なり後者は不適格となると説明される。受動構文にはこの制約は課されず、いずれの動詞とも共起できる。

(28) の制約は、以下の3点の論拠からも支持される。

第1に、「(よ)うとする」の付加により、「終結性」を棚上げすれば、適格となる。

- (29) ヤクザが僕の腕を折ろうとしてきた。(cf. 25b)

第2に、行為を一連の行為の1つと解釈し、「終結性」を棚上げすれば、適格となる。

- (30) (ヤクザの拷問を受けている状況) 今度は腕を折ってきた。(cf. 25b)

第3に、以下のa文と異なり、b文では、試合がそこでゲームセットとなり(すなわち、事象が終結し)、その後の展開がないため、「てくる」は不適格となる。事象の「終結」は、「てくる」が表す(事象の)「出現」の意味と矛盾するのである。

- (31) a. (剣道三本勝負) 相手が先に一本を取ってきた。
 b. (剣道一本勝負) *相手が一本を取ってきた。

- (32) a. 敵が初回からがんがんヒットを打ってきた。
 b. *敵が最終回にサヨナラヒットを打ってきた。

5. 「行為の方向づけ」の「てくる」の拡張パターン

「行為の方向づけ」の「てくる」は、話し手領域にいる人物（典型的には、話し手）の事象への関与の仕方により、大きく3パターンに分けることができる。

1つ目のパターンは、前項動詞が話し手領域にいる人物への物の授与 / 移動を表すタイプである（以下、Aタイプの「てくる」）。

- (33) 友人が沖縄産の紅茶を送ってきたので驚いた。（『朝日新聞』2007.11.15., 夕刊）
 (34) 自分の両親を思いやる気持ちが高じ、私に電話を掛けてきたのだ。
 （『朝日新聞』1999.4.13., 朝刊）

このタイプの「てくる」の前項動詞は、「送る」「電話をかける」等の移送動詞や伝達動詞であり、話し手領域にいる人物は、物の受領者（recipient）の意味役割を担う。Aタイプの事例は、英語では、典型的には二重目的語構文や to-与格構文で表される。

2つ目のパターンは、前項動詞が話し手領域にいる人物に対する直接的な行為を表すタイプである（以下、Bタイプの「てくる」）。「叩く」のような物理的な力を表す行為の他、「怒る」、「からかう」のような情動的な力や言語的な力を表す行為も現れる。

- (35) 無言で激しくたたいてきた。（『朝日新聞』2005.4.3., 朝刊）
 (36) 彼は真剣なまなざしで怒ってきた。（『朝日新聞』2007.5.16., 朝刊）
 (37) 4年生のころ、相手が3、4人で、私をからかってきた時、キレた。
 （『朝日新聞』1998.4.9., 朝刊）

話し手領域にいる人物は、被動作主（patient）の意味役割を担う。行為の影響が直接的である点で、Bタイプの「てくる」は、直接受動文と機能的な類似性を有する。Bタイプの事例は、英語では、他動詞構文や at/on を介する動能構文で表される。

3つ目のパターンは、前項動詞の行為から、話し手が間接的な影響を受けることを表すタイプである（以下、Cタイプの「てくる」）。

- (38) 相手側の方が、一方的に協定書を破棄してきた。（『朝日新聞』1990.6.18., 朝刊）
 (39) 相手は甘い球を逃さず打ってきた。（『朝日新聞』2007.7.23., 朝刊）
 (40) 「宮本選手は大事な場面でバットを決めてきた。その差がスコアに出た」
 （『朝日新聞』2007.8.27., 朝刊）

ここでの話し手は、行為の影響を間接的に被る受影者である。Cタイプの「てくる」

は、「間接的受影性」を表す点で、次のように間接受動文と機能的類似性をなす。

- (41) この場面で{敵がバントをしてきた／敵にバントをされた}。(野球)

英語では、間接的受影性を表す構文に、Curme (1931: 106) の言う「利害与格」(dative of interest) の *on* がある。「利害与格」の *on* は、被害を表す点で、恩恵を表す *for* と対立をなす。Jackendoff (2007: 204) は、この *on* を「被害付加詞」(adversative adjunct) とし、「恩恵付加詞」(benefactive adjunct) の *for* と機能的対立があるとする。¹⁰ 「利害与格」の *on* は、付加詞で実現する参加者が出来事から被害的影響を被ることを表す。

- (42) a. Every three years he's raised the rent *on us*. (Curme 1931: 106)
 b. The stapler's run out *on me*. (Lee 2001: 50)
 c. Their gardener all of a sudden quit *on them*.

「利害与格」の *on* は、「行為の方向づけ」の「てくる」と異なり、b 文のように非行為的な非対格動詞とも共起でき、c 文のように受影者を話し手に限定しない点で直示性を持たない。このような違いはあるものの、両者が間接的受影性を表す構文として発達している事実は興味深い。両者の間接的受影性は、それぞれの本来の意味である「接触」、「求心的接近」からの比喩的な拡張概念として捉えることができる。

A タイプの「てくる」は、積極的に受影性を表すわけではないため、受影性を表す受動形式と共起し得る。一方、B タイプ、C タイプの「てくる」は、受影性を表すため、同じく受影性を表す受動形式との共起は冗長的であり、不自然となる。¹¹

- (43) 私は太郎に夜中に電話をかけてこられた。(A タイプ)
 (44) ?私は太郎に怒ってこられた。(B タイプ)
 (45) ?私は会社に給料を減らしてこられた。(C タイプ)

ここで、実況発話で認められる以下の興味深い「てくる」の例を見てみよう。

¹⁰ ただし、*for* は、主語が動作主に限られる点で、*on* とは異なる制約を持つと言える。

(i) It rained {*on me*/**for me*}.

日本語でも、受益者格「のために」は主語が動作主でなければ使用できない。

(ii) a. 雨が降ってくれた。 b. *雨が私のために降ってくれた。

¹¹ 「(ら)れる+てくる」の連結は、いずれのタイプでも不適格となる(「てくる」を「継続型アスペクト」(場合によっては「継起移動」として解釈すれば適格となる)。「行為の方向づけ」の「てくる」では、主語が話し手であってはならない(=14)からである。

(i) *私は太郎に夜中に電話をかけられてきた。(A タイプ)

(ii) *私は太郎に怒られてきた。(B タイプ)

(iii) *私は会社に給料を減らされてきた。(C タイプ)

- (46) ここで鉄人坂井がトリュフを入れてきた！ (料理対決での実況)
 (47) これもカナダらしいというか、ユーモアある泳ぎをしてきます！
 (北京五輪シンクロ, 2008.8.16.)
 (48) フランスが三走を入れ替えてきました！ (北京五輪自転車, 2008.8.16.)
 (49) やっぱ、イチロー、バントしてきましたねー。 (野球 WBC, 2009.3.16.)

ここでは、主語と話し手（アナウンサー）が「対抗関係」（または「敵対関係」）にあるわけではない。(49) のように、自国の選手の行為にも「てくる」を使うことができる。この種の実況発話で見られる「てくる」は、試合や対決場面での主語の「仕掛け・攻め」の行為を描写するコンテキストで用いられる。ここでの話し手（アナウンサー）は、物の受領者でも行為の被動作主でもないため、この種の「てくる」は、A タイプ、B タイプではなく、C タイプの特殊ケースとみなすことができる。

6. 敵対的行為に対する被害意識の誘発と誘導推論

「てくる」文における主語と話し手が「加害行為の加害者と被害者」（男が私の首を絞めてきた）、「労使紛争の使用者と労働者」（会社側が一方的に契約を破棄してきた）、「敵対関係にある企業同士」（ヤマダ電機がうちの隣に店を出してきた）といった対立関係にあるコンテキストを考えてみよう。この場合、主語と話し手は「攻める-攻められる」の「対抗関係」にある。主語の行為は、話し手にとって脅威となる敵対的行為であることから、話し手にとって好ましくない行為として認識されやすくなる。

では、この話し手の被害意識は、「てくる」に焼き付いた語彙的意味と言えるであろうか。このことを「会社が給料を半分に減らしてきた」を例に考えてみよう。

- (50) 規約に反し、会社が我々社員の給料を半分に減らしてきた。
 (51) あの会社は、我々の提案を受け入れ、社員の給料を半分に減らしてきた。

話し手が社員である (50) の場合、話し手にとって会社側の行為は不当な侵害行為であり、話し手の被害意識が誘発される。しかし、話し手が経営コンサルタントである (51) の場合、会社側の行為は侵害行為とはみなされない。ここでの話し手と会社は敵対的に張り合う「対抗関係」ではなく、単にビジネス相手として対座する「対向関係」にある。この場合、話し手の被害意識は誘発されず、利害の点で中立的となる。

このように、被害の意味は、「対抗場面」という特定のコンテキストの下での「誘導推論」(invited inference) (Traugott and Dasher 2005: 34) により生じる (キャンセル可能な) 語用論的意味であり、「てくる」の語彙的意味とは言えないことがわかる。「行為の方向づけ」の「てくる」は、あくまで話し手への「仕向け・仕掛け」を表すのであり、被害意識

まではその語彙的意味としてエンコードされていないのである。¹²

しかし、「てくれる」の使用が期待される場面で敢えて「てくる」を使用した場合、「てくれる」とのシステムティックな対比により、「てくる」が臨時的に「被害」の意味を担う現象が、とりわけ好ましい意味特徴を有する前項動詞（「やさしくする」「褒める」等）との共起において顕著に観察される。たとえば、太郎が話し手に対してやさしくしたり、褒めたりしたことを能動文として描写する場合、「太郎がやさしくしてくれた」や「太郎が褒めてくれた」のように「てくれる」による標示が一般的である。この場合に敢えて「太郎がやさしくしてきた」や「太郎が褒めてきた」のように「てくる」によって標示した場合、話し手が主語の行為を「(下心のある) 策略行為」とみなし、当該の行為が自己にとって好ましくない行為であるという認識を持っているというニュアンスが生じる（古賀 (2008: 254) も参照）。このことは、この種の「てくる」文が動詞「嬉しい」の補文内容としては成立しにくいことからわかる。

(52) 私は太郎がやさしくし {てくれて/??てきて} 嬉しかった。

(53) 私は太郎が褒め {てくれた/??てきた} ことが嬉しかった。

この場合、恩恵性をコード化する「ベネファクティブ構文」(benefactive construction) の「てくれる」と機能領域をすみ分ける形で、「てくる」が臨時的に被害性をコード化する「マルファクティブ構文」(malefactive construction) として機能している。¹³

7. 近隣言語の状況

ここで、東アジアの膠着型言語で、日本語と文法的特徴を多く共有する言語である韓国語を見てみよう。韓国語の COME 動詞「ota」は、複合動詞の後項へと文法化しているが、「行為の方向づけ」の用法が極めて不活発である（補助動詞「ota」は、「同時移動」「継起移動」「継続型アスペクト」「移動の方向づけ」の用法は持つ）。韓国語では、日本語と異なり、行為が話し手領域に仕向けられる場合でも、一般に動詞の普通形（無標形式）で表

¹² 「対抗場面」の下では必ず被害意識が誘発されるわけでもない。次の例では、話し手は主語の行為を対抗的に捉えているが、その行為を好ましくない行為とはみなしていない。

(i) 有難いことに、敵のほうが先にピッチャーを代えてきた。

¹³ 一方、COME 動詞がベネファクティブ構文として発達している言語もある。ラフ語（シナ・チベット語族）では、「COME 動詞」（直示動詞）を語彙的資源とする particle の「lâ」が、〈一・二人称〉にとっての恩恵性を表し、「GIVE 動詞」（非直示動詞）を語彙的資源とし、〈三人称〉にとっての恩恵性を表す post-head versatile verb の「pî」と範列関係をなす。

(i) cho lâ (V+Pv) 'chop for me/us/you'

(ii) cho pî (V+Vv) 'chop for him/her/them'

(Matisoff 1991: 396)

される。以下、2名のインフォーマントの容認判断をAIBで示す（容認判断は[*、??、?、(?)、OK]の5段階である。ローマ字転写はイエール式による）。

- (54) kheyn-i na-eykey phyenci-lul {ssessta/?!/?sse wassta}.
 ケン-が 私-に 手紙-を 書いた 書いてきた
- (55) kheyn-i na-eykey pol-ul {tencyessta/*!tencye wassta}.
 ケン-が 私-に ボール-を 投げた 投げたきた
- (56) kheyn-i na-lul {nolyepoassta/*!nolyepwa wassta}.
 ケン-が 私-を にらんだ にらんできた
- (57) kheyn-i na-uy tali-lul {palpassta/*!/?palpa wassta}.
 ケン-が 私-の 足-を 踏んだ 踏んできた
- (58) kheyn-i na-uy yeph-ey {ancassta/*!anca wassta}.
 ケン-が 私-の 隣-に 座った 座ってきた
- (59) hoysa-ka kuplyo-lul {cwulyessta/?!/?cwulye wassta}.
 会社-が 給料-を 減らした 減らしてきた
- (60) kheyn-i homlen-ul {nolyessta/*!nolye wassta}.
 ケン-が ホームラン-を 狙った 狙ってきた

日本語で不適格・不自然となる例は、むしろ韓国語でも不適格となる。

- (61) kheyn-i na-uy phal-ul {pwulettulyessta/*!pwulettulye wassta}.
 ケン-が 私-の 腕-を 折った 折ってきた
- (62) kheyn-i cenhwa-lul {kkunhessta/*!kkunhe wassta}.
 ケン-が 電話-を 切った 切ってきた

以上の事実、日本語と異なり韓国語は、「話し手領域に向かう行為」と「話し手以外の領域に向かう行為」を言語的に区別しない強い傾向にあることを示している。¹⁴

¹⁴ 韓国語でも「行為の方向づけ」の「ota」の使用が可能な例が極めて散発的ながらも、Aタイプの事例を中心に存在する。この場合、動詞の普通形と「ota」形との使い分けが問題となるが、後者には前者にはない「被害」のニュアンスが含意としてある。

- (i) a. kheyn-i na-eykey chayk-ul {ponayssta/ponay wassta}.
 ケン-が 私-に 本-を 送った 送ってきた
- b. kheyn-i na-eykey cenhwa-lul {kelessta/kele wassta}.
 ケン-が 私-に 電話-を かけた かけてきた

それゆえ、次のような「恩恵」を表す GIVE 動詞「cwuta」の後続は不自然となる。

- (ii) a. ?!/? kheyn-i na-eykey chayk-ul ponay wa cwuessta.
 ケン-が 私-に 本-を 送ってきてくれた
- b. ?!/? kheyn-i na-eykey cenhwa-lul kele wa cwuessta.
 ケン-が 私-に 電話-を かけてきてくれた

8. ダイクシス表現の歴史的形成と領域区分化

日本語では、「話し手以外の領域に向かう行為」は動詞の普通形、「話し手領域に向かう行為」は「てくる」「てくれる」形式で標示され、両事象が言語的区別をなす。これは日本語の歴史的変化において重要な意味合いを持つ。本節では、新たに日本語の体系的变化として次の潮流が認められることを主張し、「行為の方向づけ」の「てくる」の発達がこのような歴史的変化の潮流の中に位置づけられることを論じる。

- (63) 日本語は、自己(話し手)の領域内の事物・事象と他者(聞き手、第三者)の領域内の事物・事象とを言語的に区別する方向に発達してきている。

この「領域区分化」のプロセスは、ダイクシス表現(視点制約)を生み出す原動力ともなる。以下で見るように、(63)は様々な言語現象に通低する変化のプロセスである。

第1に、現代語の授与動詞「くれる」(古語では「くる」)は、求心的授与を表すダイクシス動詞であるが、古くは非求心的授与も表す非ダイクシス動詞であった(金水(1989: 14)参照)。古代語の「やる(遣る／行る)」は、「(手紙を)送る」「(人を)行かせる」という限られた意味を表す動詞であり、一般的な物の授与を表す授与動詞としては発達していなかった。中部地方以東と九州南西部以南の方言地域で非求心的授与の「くれる」が使われているが、これは古語の名残である(日高2007: 110-112)。(64)は求心的授与、(65)は非求心的授与を表す「くる」である。現代語では、非求心的授与は「やる」「あげる」で表され、求心的授与を表す「くれる」と言語的区別をなす。

- (64) 逢坂を 今朝越え来れば 山人の 我にくれたる (王礼仁久礼多留) 山杖ぞこれ 山杖ぞこれ (神楽歌、杖、32頁)
- (65) この長櫃の物は、みな人、童までにくれたれば、飽き満ちて、船子どもは、腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波立てつべし。 (土佐日記、8頁)

第2に、現代語の移送動詞「よこす」(古語では「おこす」)は、求心的移送を表すダイクシス動詞であるが、古くは非求心的移送も表す非ダイクシス動詞であった。岐阜、富山、石川等の方言地域で使用される「いこす」「いくす」(「よこす」の方言的バリエーション)は非求心的移送も表すが(『日本方言大辞典』)、これは古語の名残と言える。(66)は求心的移送、(67)は非求心的移送を表す((67)の「おこす」は「やる」と同じ意味を表す)。非求心的移送は、現代語では「やる」や「おくる」が担う。

- (66) 二日。なほ大湊に泊まれり。講師、物、酒おこせたり。 (土佐日記、21頁)
- (67) 文を書きて、やれども、返りごともしせず。わび歌など書きておこすれども、甲斐なしと思へど、十一月、十二月の降り凍り、六月の照りはたたくにも、障ら

ず来たり。

(竹取物語、21 頁)

第3に、「いらっしゃる」や「お出で」は、一般に「いる」「行く」「来る」の敬語動詞とされるが、移動の意味に関しては、求心的移動に方向性が限定されつつあり（存在の意味は保持している）（水谷 2007: 49）、「直示化」が進行している。¹⁵ 次のように、現代語の「お出で」は、移動の意味に関しては、求心的移動に方向性を限定した敬語動詞として機能し、非求心的移動には「お行き」が使用され、両移動が言語的区別をなす（指示代名詞「こちら」は、発話時に話し手が占める場所を指すものとする）。¹⁶

(68) a. 早く {こちら／*あちら} にお出で。

b. 早く {*こちら／あちら} にお行き。

第4に、現代語の移動動詞「来る」は、聞き手領域への話し手の移動を表す場合、平叙文の下では使用できない（例：[電話で] 今から君の家に {*来る／行く} ね）。しかし、古くはこのような場合に「来」が使用できた（近藤 1986: 89; 澤田 2009: 37-48）。沖縄、九州（大分を除く）、山陰・北陸の一部などの日本列島の西側の周辺部の方言地域では「行く」の意で「来る」が使えるが（『現代日本語方言大辞典』）、これは古語の名残と考えられる。次の「いま参り来む」は、「早う来や」という相手の発話に対する返答となっており、「参り来む」の「来」が「行く」の意を表す。古代語の「来」は、英語の「come」と似た振る舞いをなすのである（例：[聞き手への移動で] I'm coming.）。¹⁷

(69) さりければ、いとみそかに立てりけるところにぞ、「などかさてはものしたまふ。早う来や」といひたければ、「いま参り来む。この前裁の、いとおもしろく、くまぐましき、見るなり」といひてぞ、立てりけるに、そこの法師のがり、間どもなく人やる。

(平中物語、十七、僧に見返られる、482 頁)

¹⁵ 山崎 (1963: 111)、水谷 (2007: 62) によれば、「いる」「行く」「来る」の敬語動詞「おじゃる」、「おりやる」（それぞれ、「お出である」、「お入りある」の変化語）も、移動の意味に関しては、求心的移動（「来る」の意）に方向性が限定されていたとされる。

¹⁶ 水谷 (2007: 54) によれば、「お出で」は、明治期の作品では次のように「お行き」の意味としての使用が見られるが、大正期以降の作品ではその使用が見られなくなるという。

(i) もう用はないのよ。早くあっちにお出で。(有島武郎『或る女』)

¹⁷ 古代語では、「聞き手以外の領域への話し手の移動」を表す場合にも「来」が使用できた。次の例は、聞き手領域への移動を表すものではないが、「来」が使用されている。

(i) ... 家島は 雲居に見えぬ 我が思へる 心和ぐやと 早く来て (波夜久伎弓) 見むと思ひて 大船を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ

(萬葉集、卷第十五・3627、37 頁)

現代語では、(i) のような状況で「来る」は使用できず、「行く」が使用される。古代語の「来」は、現代語の「来る」に比べ視点制約が緩かったと考えられる（澤田 2009: 52-53）。

聞き手領域への移動は、現代語では「行く」が担う。日本語は、話し手領域への移動と聞き手領域への移動を言語的に区別するようになったのである(澤田 2009: 47)。¹⁸

以上の言語現象は、領域区分化(または、なわ張り区分化)を確立させていった点で、大局的には同じ変化の方向性を示している(さらに、「くれる」「よこす」「いらっしゃる」「お出で」「来る」は、共に、話し手領域への「求心的方向性」に意味領域を限定・縮小させていった点でも共通性が認められる)。「てくる」の「行為の方向づけ」用法の発達も、以上のような歴史的変化の潮流の中に位置づけられる。話し手領域に向かう求心的行為を、話し手以外の領域に向かう非求心的行為から区別するための言語的指標として、「てくる」が利用されたのである。

日本語はこの種の領域区分化を広範囲の言語現象に反映させている点が特徴的である。韓国語は日本語と類型論的な文法的特徴を多く共有する言語であるが、領域区分化を日本語ほど広範囲の言語現象に反映させていない。これは、COME 動詞「ota」の「行為の方向づけ」用法が未発達である、GIVE 動詞が「cwuta」一語からなる、基本的に絶対敬語のシステムを保持しているといった言語的徴証からわかる。ただし、聞き手領域への話し手の移動は GO 動詞「kata」で表し、中称指示詞「ku」が聞き手領域を指示できる(対立型システムが形成されている)点は日本語と同じである。¹⁹

¹⁸ 聞き手領域を独立に認め、事物・事象が話し手領域に属するか聞き手領域に属するかで言語形式を区別する対立型システム(田窪 1991: 136-140)を発達させた現象として、移動動詞の他に、さらに指示詞と敬語が挙げられる(澤田 2009: 49-50)。金水・岡崎・曹(2002: 231-233)は、上代のソ系列の用例には明らかな直示用法が見られず、ソの聞き手領域指示用法が生じたのは中古以降であることを説得的に論じている(藤本(2009: 124-125)も参照)。日本語の直示空間の指示のシステムには元来、話し手から近いか遠くないかの距離区分のみが存在し、話し手領域に属するか聞き手領域に属するかの領域区分(対立型システム)は歴史上後発的に生じたことになる。

さらに、古代語の敬語は、聞き手と無関係に一定の敬語で待遇する絶対敬語であり、話題の人物が身内であっても目上であれば尊敬語が使われていた(菊地 1997: 133)。一方、現代語の敬語は、話題とする目上の人物が話し手領域に属するか聞き手領域に属するかで敬語形式が区別される(敬意の標識を変える)相対敬語である。日本語は、話題の人物が話し手領域に属するか聞き手領域に属するかが敬語使用の重要なファクターとなるに至ったのである。

¹⁹ 本稿の分析観点は方言にも有効である。琉球語宮古池間方言の COME 動詞「fuu」は「行為の方向づけ」用法が不活発である。林由華氏(個人談話)によれば、池間方言ではこの用法は A タイプでのみ成立する(この方言では、共通語の「てきた」に対応する形式ではいずれのタイプでも使用されず、「てきてあった」に対応する形式で使用される)。

(i) tarooga du banunkai honnu ukurii tti atai. (A タイプ)

太郎が(焦点) 私に 本を おくって きて あった

(ii) *tarooga du banuu uduuhii tti atai. (B タイプ)

太郎が(焦点) 私を おどして きて あった

(iii) *tarooga du бага tunain bizi tti atai (C タイプ)

太郎が(焦点) 私の となりに 座って きて あった

さらに、池間方言では、GIVE 動詞が「fii」(「くれる」)一語からなり、聞き手領域への話し手の移動

9. むすびにかえて

本稿では、以下のことを明らかにした。

- i. 平原クリー語などの言語の逆行構文が示す「方向性」と日本語の「てくる」「てくれる」が示す「方向性」とは異質である。前者は「動作主-被動作主間の方向性」であり、後者は「事象-話し手間の方向性」である。平原クリー語などの言語の逆行態の人称原理を「てくる」「てくれる」に適用することはできない。
- ii. 「行為の方向づけ」の「てくる」は、話し手が（自己の心的領域内に「出現」した）主語の行為を自己に仕向けられた／仕掛けられた行為として心理的に捉えることを表す。この現象は、ダイクシス体系の一つとして、新たに「心理的ダイクシス」というカテゴリーを立てる必要性があることを示している。
- iii. 「行為の方向づけ」の「てくる」は、話し手領域にいる人物の事象への関与の仕方により、大きく3タイプに分けることができる。
- iv. 「行為の方向づけ」の「てくる」に感じられる被害の意味は、基本的に「対抗場面」という特定のコンテキストの下で生じる語用論的意味である（ただし、「てくれる」の使用が期待される場面で敢えて「てくる」を使用した場合、当該の行為が話し手にとって好ましくないという含意が生じる）。
- v. 韓国語の COME 動詞「ota」は、「行為の方向づけ」の用法が不活発である。このことは、基本的に韓国語は、「話し手領域に向かう求心的行為」と「話し手以外の領域に向かう非求心的行為」を言語的に区別しないことを示している。
- vi. 日本語は、話し手領域に属するのかそれ以外の領域に属するのかによって事物・事象を敏感に表現し分ける方向に発達してきている。「行為の方向づけ」の「てくる」の発達もこのような言語変化の潮流の中に位置づけることができる。

本稿の考察は、ダイクシスの研究プログラムに対して、以下の理論的含意を与える。

第1に、心理的ダイクシスが関与する現象は、従来の印欧語のデータを中心としたダイクシスの類型化（Marmaridou 2000: 66）の見直しを迫るものである。かつて Fillmore (1966: 220) は、幾つかの東アジアの言語に見られる組織化された敬語体系の存在がダイクシスカテゴリーの拡大につながる可能性を示唆した。現在では社会ダイクシスがダイクシスの一つとして定着している。今後ダイクシスの体系は世界の諸言語の新しいデータの発掘に伴って再編され、より精緻化されていくことが期待される。本稿で提案した心理的

には COME 動詞「fuu」（「来る」）が使われる（『現代日本語方言大辞典』）。池間方言は、現代日本語よりも古代日本語に近い位置（または、そこからやや進んだ位置）にあると言える。

ダイクシスにはどのような表現が属するのか、心理的ダイクシスの有する一般言語学的意味とは何かといった問題も今後追及すべき重要な課題である。²⁰ 授与動詞「くれる」が文法化した「てくれる」などは、心理的ダイクシスとみなせる。

第2に、本稿の考察はダイクシスの歴史語用論的研究の更なる発展を促すものである。これまで個々のダイクシス表現の歴史的記述は進められてきてはいるものの、より一般的な視点からそれらの歴史変化を体系的に捉える分析はあまりなされてこなかった。²¹ 本稿では、授与動詞、移送動詞、敬語動詞、移動動詞などの言語現象に通低する歴史的变化の方向性を「領域区分化」という統一的原理によって示した。日本語のダイクシス表現の多くは、この領域区分化の所産である。この領域区分化を動機づける要因に関しては、認知的要因と共に社会的・対人的要因を視野に入れた考察が必要である。移動動詞における聞き手領域の形成は、聞き手への配慮といったコミュニケーション上の要請（ネガティブ・ポライトネスの発動）により生じた可能性がある（澤田 2009: 48）。

また、領域区分化のプロセスが世界の諸言語のダイクシス表現の歴史的展開の中でも認められるのかに関しても調査が必要である。韓国語の移動動詞や指示詞には話し手・聞き手の領域区分化が反映されているが、日本語と同様、この領域区分化が後発的に生じた可能性がある。日本語方言の状況と合わせて、今後調査されるべき問題と言えよう。

ダイクシスは、身体・知覚・思考を使って対象との距離を測りながら他者とのコミュニケーションを図る言語主体の存在を色濃く反映するすぐれて認知的・社会的な概念であり、民族固有のコスモロジー（世界観）や社会・文化構造を映し出す鏡でもある。ダイクシス研究は、歴史言語学や言語類型論に対して有益な知見を提供するだけでなく、人間のコミュニケーションや認知のメカニズムの根源、さらには、民族のコスモロジーの多様性の解明に向けた基礎的研究となる点で、言語学と人類学、社会学、心理学などの学問分野を繋ぐ学際的な研究領域の一つとして位置づけることができる。

²⁰ さらに、ダイクシスのカテゴリー変換についても考える必要がある。あるダイクシスから別のダイクシスへとカテゴリーが変わる場合、場所ダイクシスが基点となるケースが多い。山梨（2000: 99-101）は、「あなた」「そなた」「おまえ」「手前」などの人称表現が方向・場所表現から拡張している事実をプロファイル・シフトの観点から説明している。ダイクシス研究は、語用論と認知言語学の交差領域の一つとして、今後更なる展開が期待できる。

²¹ その中で、金水（1989）は、ダイクシスを含む日本語の歴史的变化の体系を示した重要な先駆的研究である。金水（1989）は、近藤（1986）の議論を踏まえ、日本語が、指示対象を敬卑の観点から分類する言語的装置が豊富かつ優位な言語から、「話し手／聞き手／その他」の関係を遠近・親疎関係その他を表す手段によって分類する言語的装置が豊富かつ優位な言語となったことを、敬語動詞や授受動詞などの言語現象をもとに論じている。本稿の議論は、金水（1989）の議論と方向性を共有するが、本稿は、敬語が優位か否かの観点は含んでおらず、領域区分化が見られるか否か（発達しているか否か）の観点のみに注目したものである。

参照文献

- Bühler, K. 1934. *Sprachtheorie*. Stuttgart: Fisher.
- Comrie, B. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. Chicago: University of Chicago Press.
- Comrie, B. 2003. "Recipient Person Suppletion in the Verb 'Give'." In M. R. Wise, T. N. Headland, and R. M. Brend (eds.) *Language and Life*, 265–281. Texas: SIL International and The University of Texas at Arlington Publications in Linguistics.
- Croft, W. 2001. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston: D.C. Heath and Company.
- DeLancey, S. 1991. "Origins of Verb Serialization in Modern Tibetan." *Studies in Language* 15, 1–23.
- Fillmore, C. J. 1966. "Deictic Categories in the Semantics of 'Come'." *Foundations of Language* 2, 219–227.
- 藤本真理子. 2009. 「古代語の「カ（ア）系列指示詞」再考」『日本語文法』9: 2, 122–138. 日本語文法学会.
- Heine, B. and T. Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 日高水穂. 2007. 『授与動詞の対照方言学的研究』東京：ひつじ書房.
- Jackendoff, R. 2007. *Language, Consciousness, Culture*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 菊地康人. 1997. 『敬語』東京：講談社学術文庫.
- 金水敏. 1989. 「敬語優位から人称性優位へ——国語史の一潮流——」『女子大文学 国文篇』40, 1–17.
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚. 2002. 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究——日本語・韓国語・トルコ語——」生越直樹（編）『対照言語学』217–247. 東京：東京大学出版会.
- 久野璋. 1978. 『談話の文法』東京：大修館書店.
- 古賀裕章. 2008. 「「てくる」のヴォイスに関連する機能」森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）『ことばのダイナミズム』241–257. 東京：くろしお出版.
- Koga, H. and T. Ohori. 2008. "Reintroducing Inverse Constructions in Japanese: The Deictic Verb *kuru* "to come" in the Paradigms of Argument Encoding." In R. D. Van Valin, Jr. (ed.) *Investigations of the Syntax-Semantics-Pragmatics Interface*, 37–57. Amsterdam: John Benjamins.
- 近藤泰弘. 1986. 「敬語の一特質」『築島裕博士還暦記念国語学論集』85–104. 東京：明治書院.
- Langacker, R. W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lee, D. 2001. *Cognitive Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Lyons, J. 1982. "Deixis and Subjectivity: Loquor, ergo sum?" In R. J. Jarvella and W. Klein (eds.) *Speech, Place, and Action*, 101–124. Chichester: John Wiley & Sons Ltd.
- Marmaridou, S. S. A. 2000. *Pragmatic Meaning and Cognition*. Amsterdam: John Benjamins.
- Matisoff, J. A. 1991. "Areal and Universal Dimensions of Grammatization in Lahu." In E. C. Traugott and B. Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization* 2, 383–453. Amsterdam: John Benjamins.

- 水谷美保. 2007. 「敬語形式「オイデ」の意味用法の変化」『阪大日本語研究』19, 49-66.
- Newman, J. 1996. *Give*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Oshima, D. Y. 2007. "Syntactic Direction and Obviation as Empathy-based Phenomena: A Typological Approach." *Linguistics* 45: 4, 727-764.
- 坂原茂. 1995. 「複合動詞「Vて来る」」『言語・情報・テキスト』2, 109-143.
- 澤田淳. 2007. 「日本語の授受構文が表す恩恵性の本質——「てくれる」構文の受益者を中心として——」『日本語文法』7: 2, 83-100. 日本語文法学会.
- 澤田淳. 2008. 「「変化型」アスペクトの「テクル」「テイク」と時間性——タ形「テキタ」と「テイッタ」の非対称的な分布に注目して——」『日本語の研究』4: 4, 63-69. 日本語学会.
- 澤田淳. 2009. 「ダイクシスへの歴史語用論的アプローチ——ダイクシス動詞「来る」の歴史的展開と話し手・聞き手の対立——」*Ars Linguistica* 16, 32-55. 日本中部言語学会.
- Shibatani, M. 2003. "Directional Verbs in Japanese." In E. Shay and U. Seibert (eds.) *Motion, Direction, and Location in Language*, 259-285. Amsterdam: John Benjamins.
- Shibatani, M. 2006. "On the Conceptual Framework for Voice Phenomena." *Linguistics* 44: 2, 217-269.
- Sidnell, J. 2009. "Deixis." In J. Verschueren and J. Östman (eds.) *Handbook of Pragmatics Highlights 1: Key Notions for Pragmatics*, 114-138. Amsterdam: John Benjamins.
- 田窪行則. 1991. 「ダイクシスと談話構造」近藤達夫(編)『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説(下)』127-147. 東京: 明治書院.
- Traugott, E. C. and R. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山田敏弘. 2004. 『日本語のベネファクティブ』東京: 明治書院.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』東京: くろしお出版.
- 山崎久之. 1963. 『国語待遇表現体系の研究』東京: 武蔵野書院.

使用テキスト

- 萬葉集: 『新編日本古典文学全集 8 萬葉集④』小学館.
- 竹取物語: 『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館.
- 平中物語: 『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館.
- 土佐日記: 『新編日本古典文学全集 13 土佐日記 蜻蛉日記』小学館.
- 神楽歌: 『新編日本古典文学全集 42 神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』小学館.